

村井衝平先生へ

衣 斐 成 司

村井衝平先生は、昭和四八年に本学法学部助教授として赴任されました。この赴任のきっかけは、当時すでに最長老であつて、そしてなお現存しておられる当時の長老者は二名であるが、そのなかの一人であり、現在すでに九五歳余になられるが、なお嬰鑠とされる石本雅男先生の推薦によるものであつた。一言伝えておくが、いう前置きの後に、それは事前に何も聞いていないと会議の席上で喚くのではないかとの先生方の懸念があつたことのように、話しておきたいことがあるので来るようにと呼ばれて行くと、石本先生は、村井先生を今度、民法の身分法の分野で採用する事になつたが、「教授会の前に君に伝えておくが、なにぶんよろしく」と釘をさされた。この時代での明治生まれの人々の何分よろしくは、それなりに意味深長であり、また十歳余も年長であると聞いたが、今でもそうだが当時はほんの駆け出しで世間知らずのため、よく事情が飲み込めないまま、当時の風潮では、それが民主的な手続きに基づくものであるとかなひとかに關係なく、また民法関係者では自身が最少であつたこともあり、一応気を揉んでいた。しかし、初対面のとき、先生は、想像以上にはるかに紳士的であり、しかもすこしお顔を赤らめながら挨拶なされたので、ほっとしたことを覚えている。

村井先生の父君は、土地柄に相応しく港町神戸での海事法の弁護士として著名なお方で、ご子息に衝平という

名を冠せられ、百歳間近のご長命を保たれた偉丈夫であった。本学に赴任なされる前は、父君の手伝いもなさっていたとのことであり、また先生ご自身は、昭和五三年以後神戸家庭裁判所の調停委員をお受けになり、その後の長年に亘る調停委員としてのご活躍に対して神戸家庭裁判所所長から表彰を受けておられ、現在は父君と同じく弁護士である。

村井先生の本学でのご活躍はすべて好意をもって受け入れられた。まず、昭和五三年には図書館長に就任され、当時の図書館事務長との共同で図書館の改善を図られ、研究室よりも館長室での仕事に精を出されたのが始まりで、引き続き昭和五八年には法学部長をされたのであるが、とりわけ問題が山積していた時期であったが、学部長としての運営が手際よく、つねに教授会が早く終了するので評判のよい部長であった。また、学部の枠を超えて、「カナダ研究会」を大学内で結成され、みずから責任者となって活躍された。

つぎに、学生の法学研究クラブ、いわゆる法研の顧問を引き受けられ、対外的に法学部の存在を知らせる役割も担当された。また、その民法演習には女子・男子を問わず、優秀な学生が殺到し、先生の回りは常に華やかな雰囲気がいっぱい、これが現在まで続いている。それにしても、先生の指導が、他の先生よりも際だって懇切丁寧であるというわけではなかったように見える。たとえば、院生などにも、修士論文を書くのは君が書くのであるからといわれ、突き放すというのではないが、どちらかというと淡泊に指導されるのであるが、それが何故か学生を引きつけるようである。お人柄という他に表現方法がなく、われわれはその足下にも及ばないのである。

さて、専門の身分法で、先生は、とくにカナダ法に詳しく、離婚についての互責の研究が中心である。発表された著作・論文の量はわれわれの標準をはるかに超えている。いつも不思議に思うのは、先生は多忙でありながら、よく執筆される時間を見つけたされると感心するのであるが、別にワープロなどの機器を使うのでもなく、

まるで掌からひよいと論文がでてくるようで、この点においても及び得ないのである。また、離婚が研究の対象であつても、実生活では美しい奥様のもとで静かに執筆の時間を持たれたのであつて、この点でも羨ましい限りである。

しかし、われわれの世代は幸福であつたとはいえない。幼少時での戦争の影響は精神的にも物質的にも直接であつたし、長じては明治生まれの長老が、大正時代を無視して昭和の世代を子供扱いにした時代でもある。また、いわゆる若い頃には、大学は紛争の時代であり、われわれはそれを受け身で対応しなければならなかつた側だったのである。そして時代の新しさは、多様な問題を大学にもたらせた、なかでも後発の私立大学では、一般的傾向として就業の限定の無いことが採用条件であつたが、昭和五五年頃には本学でも教職員の定年制度の取り入れが問題となつてきたのである。この問題を巡つて、礼を尽くしてお招きした長老の先生方との間で、約束が違ふと迫られ、激しく衝突しなければならなかつた。これらの話もすでに年寄りの繰り言になつてしまふ程に、遠くに来てしまつた今では、はるかな過去の出来事の一つにすぎないが、われわれも若かつたのか、よく耐えてきたものと思う。そして、バブル経済に沸いた一時の就職景気の後味の悪さ、さらに人生観を変更させた神戸震災の惨事の追い打ちなどの出来事に対する感慨とは無関係であるかのように、すでに現実には、大学は冬の時代といわれ、大学そのものの鼎の軽重が問われる時代になつてしまつてゐる。

これらの事情にも左右されることなく、恬淡としたまま、村井先生は、いよいよ学究から、次の段階へ、弁護士として飛躍されることになる。近くでご相談することもできなくなるが、今後もお助言下さい。先生 お元気で。